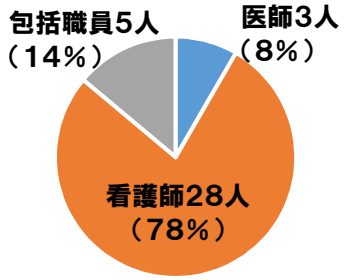
令和６年度認知症研修

【日時】令和６年１２月１９日（木）
午後６時３０分から午後７時４５分まで
【場所】登米市民病院　多目的ホール
【対象】登米市内の医師・看護師・地域包括支援センター職員
【内容】
（１）講話：「認知症の理解と対応方法」
講師：宮城県認知症疾患医療センター
（こだまホスピタル）
センター長　田中康裕　氏
（２）情報提供：「登米市内の認知症に関する地域資源の紹介」
提供者：登米市福祉事務所　長寿介護課職員

参加者
（３８人　うちアンケート回収３６人）



（１）講話：「認知症の理解と対応方法」

○**認知症とは、**「一度正常に発達した認知機能が後天的な脳の障害によって持続的に低下し、日常生活や社会生活に支障をきたすようになった状態」のこと。つまり、通常の社会生活を営んできた個人が、それを全うできない状態に徐々に陥るということ。

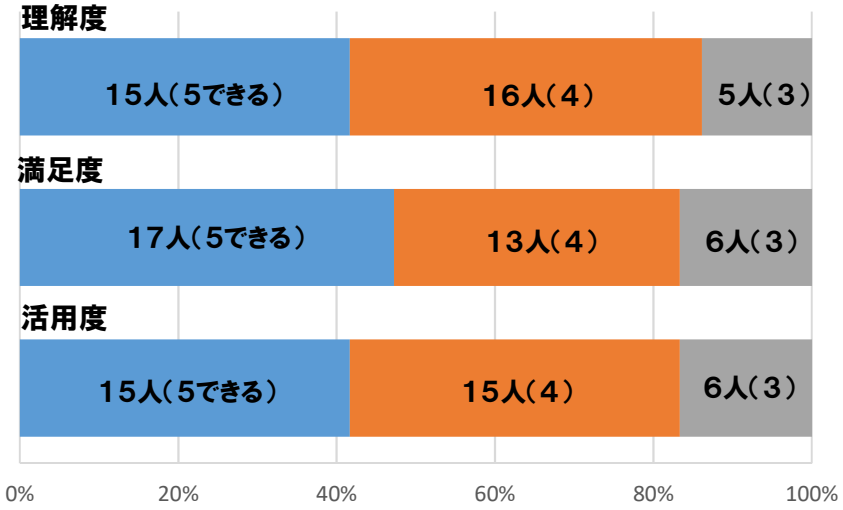
○**認知症の人の行動は援助者の鏡である。**目の前の相手がイライラした気持ちになると、その気持ちが伝わり、「何をこの人イライラしているの？」と不快な気持ちになる。医療者が「快い」気持ちで関わりができていると、認知症の人も「快い」気持ちでいられるとの考え方を忘れないようにしてほしいとご講話いただきました。

（２）情報提供：「登米市内の認知症に関する地域資源の紹介」

○登米市内の認知症カフェ、認知症サポーター養成講座、認知症サポーターステップアップ講座、認知症ケアガイドブック、世界アルツハイマーデー・アルツハイマー月間等の取組について情報提供いただきました。

○地域の認知症に対する理解や関係機関との連携を進め、改めて**認知症になっても安心して暮らせる**地域づくりの大切さを感じました。

＜アンケート結果＞
研修内容について（５段階評価）【５できる～１できない】



＜感想＞

- 援助者のイライラした気持ちは認知症の人のイライラした気持ちを呼ぶという講話に、とても共感できた。私自身も経験があった。
- 認知症について理解を深めることが大切で、地域でのカフェなどの役割が大きい。一般病院では患者の「できないこと」に目を向けられがちだが、「できること」を認め自立を支援することが第一歩。認知症の方を看る家族支援はとても重要。
- 普段の関わりで忙しくうわべだけのコミュニケーションで流してしまうことがあり反省です。

発行元：宮城県東部保健福祉事務所　高齢者支援班
2025/2/27